

教科書は子どもの思考にコミットしているのか

m135043k 濱 秀彦

本研究は教科書のテキスト文を取り出し、どのような表現の時に子どもの思考にコミットするのか調査したものである。創意工夫されて編纂された教科書の文章であるが、子どもの視点から検証すると問題が見える。たとえば、具体性を欠くあいまいな表現にとまどい、実験が進まなくなったりする場合は何度も発生している。さらに、子ども達が初めて聞く理科的な言葉が出てきたりすると、文によっては73%もの子どもが教師の説明なしでは理解できないことも判明した。教科書のテキスト文は単に事実の記載だけでなく説明的で状況が分かるものへ、また、教材の選択や充実を含めて、ページ数の拡大や子どもの思考過程にコミットするものに工夫される必要がある。

[キーワード] コミット 執筆者と児童 実験の説明文 算数の教科書との違い

1 研究の背景と目的

今年度から新学習指導要領による学校週5日制がスタートした。それにより、小中学校の学習内容も3割ほど削減され、教科書も新しくなった。

教科書は学習指導要領に基づいて編集されている。そこには、執筆者のねらいだけでなくページ数や価格などの物的な制限や教科書検定など様々な要素が加わって出版される。このような条件下でも、教科書作成者は、子どもに理解してもらいたいとして創意工夫して編纂されているに違いない。私たち教師は学校現場で、教科書は最も重要な教材の一つとして疑いもなく信じて、使用し活用している。そのような教科書について、例えば、テキスト文について、本当に子どもにコミットしているのだろうか疑問に思ったことは何度もある。

また、左巻は今回の教科書検定について、学習指導要領を絶対基準とした一切の逸脱を許さない教科書検定で、教科書の執筆者でさえ使用に耐えがたいと言わせるほど、教科書の魅力化の乏しさを嘆いている。

今、教科書に対する批判は多い。その批判は、教科書行政システムだけに限らず、最も大切な読み手であり、使い手である子どもを通して点検することが重要である。

本研究は教科書のテキスト文を取り出し、どのような表現の時に子どもの思考にコミットするのか調査した。

2、調査方法

- ① 教科書に書かれている文をプリントに書き出す。そのプリントの文章を読ませ、意味が分かる文の下に直線、分からない文章の下に波線を引かせる。(分からないと波線を付けた子どもには、どこが分からないのか、またどう直したら分かるのかを、書ける範囲で書かせた。)

次に、実験カ所の記述文を書き出した文章を読ませ、実験を行い、子どもの実験行動を観察し調査した。また、各班にテープレコーダーを置き、実験中の会話を録音することにより教科書のコミットを調査した。

授業中、実験ができなかったり、やっていなかったりした子どもには、授業後なぜできなかったのか、なぜやらなかったのかを、直接インタビューを行った。

- ② 6学年の2つのクラスを使い、1クラスにはA社の教科書、他方のクラスにはB社の教科書で同じ単元を授業する。①の方法を使って教科書による記述の違いや、実験方法の違いから、児童へのコミットの違

いを調査した。

- ③ A社の昨年度までの教科書と改訂された教科書を使って、同じ単元を同じ方法で授業し、新旧教科書での記述の違いや、実験方法の違いから、児童のコミットの違いを筆記とインタビューにより調査した。
- ④ 教科書を通した教科の違いによる子どもへのコミットの様子を調べるために、理科と同じ方法で、算数の教科書を調査した。

(1) 調査対象

長野県内の公立小学校

平成13年度：6年1組（理科）

6年4組（理科と算数）

平成14年度：6年1組（理科）

(2) 調査時期

平成13年度：9月から12月

平成14年度：5月から7月

3. 結果と考察

創意工夫されて編纂された教科書の文章であるが、子どもの視点から検証すると問題が見える。たとえば、具体性を欠くあいまいな表現（何回も、体温ぐらいのお湯、しばらくして、など）にとまどい、実験が進まなくなったりする場合が何度も発生している。さらに、子ども達が初めて聞く理科的な言葉（動脈、静脈、肺ほうなど）が出てきたりすると、文によっては73%もの子どもが、教師の説明なしでは理解できないことも判明した。

教科書の記述が、前に示した事項は理解されたものとして省略されたり、具体的な状況説明を省略したりした文章など、単純な新事実の説明だけの文章では子どもの理解にコミットできない。

また、子どもが求めている教科書は、現行のような簡潔で必要最低限の記述ではなく、

具体的で分らないことが詳しく説明してある教科書であることは、教科書研究センターからの報告や授業を行った子どもの意見からも明らかである。

一方、新しい教科書になり、内容の削減だけでなく文章や図なども変更されたカ所もある。旧教科書で子どもにコミットしていないことが認められた文章（発問も含む）や図、写真などが改訂され、子どもの思考にコミットしてきていることも認められる。

算数の教科書との比較では、1 センテンス当たり分らない言葉が、算数の教科書では1.2個に対し、理科では11.3個にもなることがわかった。

しかし現状の教科書は、ますます薄くなり、表現も簡潔になって、多様な要望を満たすことは限界に近い。教科書のテキスト文は単に事実の記載だけでなく説明的で状況が分かるものへ、また、教材（実験や観察項目）の選択や充実を含めて、ページ数の拡大や子どもの思考過程にコミットするものに工夫される必要がある。そのためには、現在の社会の規制緩和の流れは教科書行政にも反映されることが必要ではないだろうか。

4. 参考文献

- ・三浦登他「新しい理科6上」2001 東京書籍
- ・掛川一夫他「新しい理科6年上」2001 信濃教育出版
- ・広中平祐他「新しい算数6年上」2001 東京書籍
- ・左巻健男「理数力崩壊」2001 日本実業出版社
- ・藤村和男他「学校教育における教科書の体様とその教育効果に関する調査研究」2000

メールアドレス

katutaka@clubAA.com